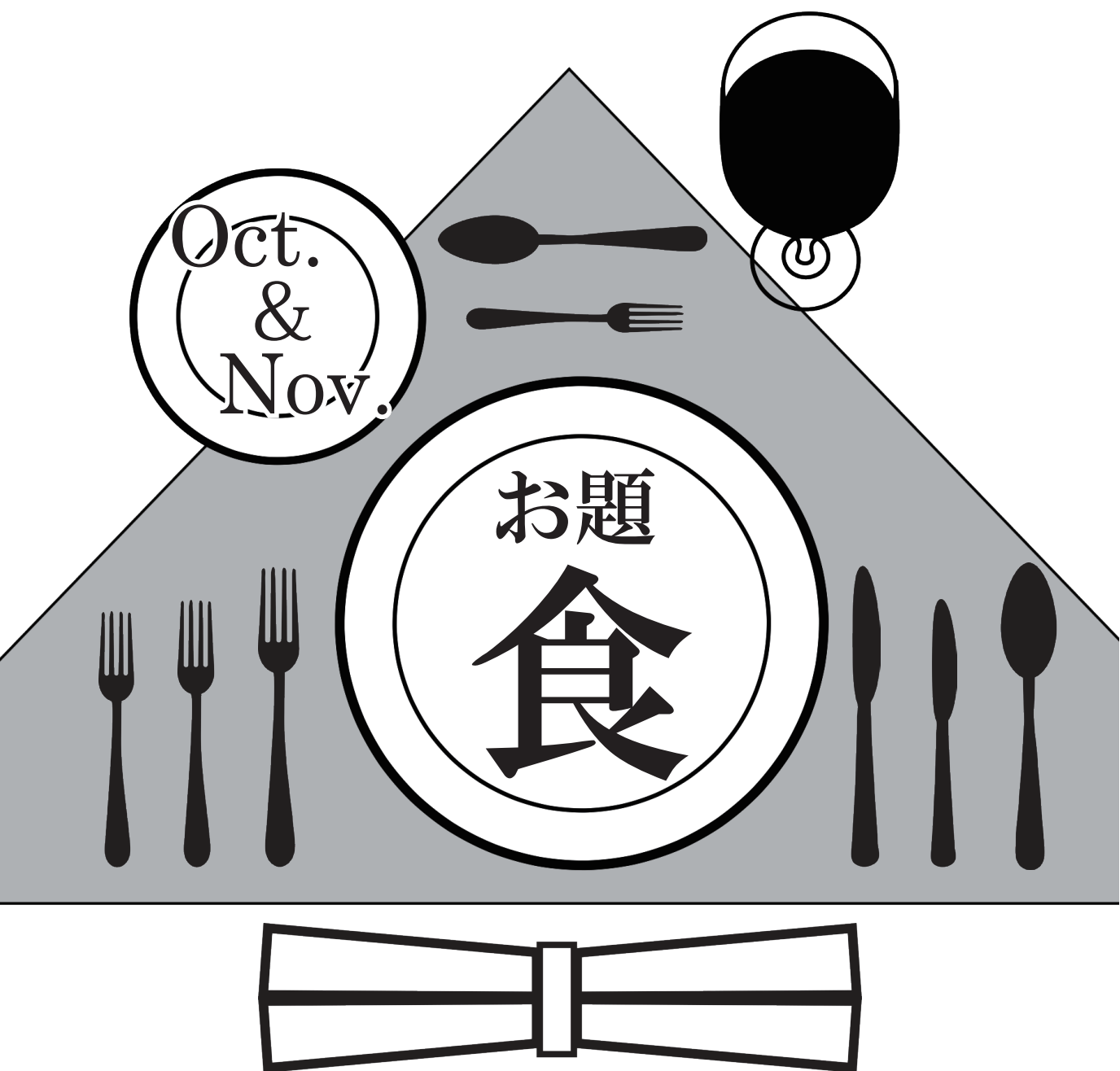


喫茶店文芸



喫茶店文芸 2022年10・11月合併号——目次

佐伯友子

華金飯 1

福原大輝

六九萬はロックマン！ 5

ナタリー爆川 244歳

「無職のコツ 第一回」 11

氷川省吾

禍病 前編 15

華金飯



佐伯友子

足掛け五カ月の業務、年度末の波瀾を辛くも乗り切った。退勤前に、ほぼ手つかずの有給をみすみす捨てるのも癪で、繰越なしの期限切れ間際に、なけなしの一日を駆け込み取得した。

職場を出るなり、携帯の音楽アプリで八〇年代シンセポップを鳴らす。骨伝導イヤホンの振動、ドラムのビートに、小走りで駅へと駆ける。夕闇を割って走る電車で、勢い一駅先へ行き抜ける。近いようで遠かった隣町で、唐突に探訪が始まる。

夕映えの商店街は、帰宅途中の勤め人と買い物客で賑わい、暮れ方の忙しなさと素朴な活気に満ちている。昭和レトロなアンティークにあふれた雑貨屋。駄菓子屋前のコインゲームに群がる小学生。タイムセールに突入したパン屋。油の跳ねる音と揚げ立ての匂いが充滿する肉屋のコロッケ。ショークースに並ぶ手作り豆腐、がんもどき、湯葉。照り映える籠盛りの果実――

新規オープンのお店の幟が目が止まる。七輪焼きの店だ。立て看板には、手書きのおすすめメニューと、店内の写真が留めてある。和モダンの内装で、味のある雰囲気だ。自炊の及ばないプロの料理を供されるほどの働きをしたと、暖簾を堂々とくぐる。

カップルやグループを尻目に、カウンターの端席に座る。宵の酒場は程よく賑わい、柔らかく穏やかな間接照明が、隠れ家的な雰囲気醸している。

ボードのメニューとお品書きから、焼酎のお湯割り、本日の刺身三種盛り、海鮮七輪焼きミニコースを注文する。

休日前夜、仕事終わりの外食が、毎週末の楽しみだ。慰労を兼ねて、一週間ぶりにまっとうな食事にありつく。朝は食パンを即席スープで喉に押し込み、昼はコンビニのおにぎりかミニ弁当。

夜は先週末の作り置きでカレーかシチューかハヤシ、あるいは鍋元に冷凍野菜と安い茹で麺を突っ込む。食べるために働いているはずが、いつの頃からか、働くために食べている。

せめてもの週末は、心ゆくまま、食に時間をかける。椎茸の肉厚さ、香を入念に噛みしめる。ハンバーグに混ぜられた大葉、柚胡椒を、鼻と舌でじっくり探る。お湯割にアジ、シャケ、イカ、スルメ、肉、茸とあれこれ肴を含んで、マリアーージュを試みる。女子大生らしい店員が、空いた皿を下げながら声を掛けてくる。

「お仕事終わりのお食事ですかあ？」

明るい髪色に濃いメイク、小柄ながらハスキーな声がよく通る。

ようやく独りになって、ぼうつとしていたい。が、若い店員の接客、気遣いの声掛けを無下にもできない。

「ええ……仕事に一区切りついたんで、たまには」

話途中で、向こうのグループ客が手を挙げ、大声で店員を呼んだ。

女独りの孤食にも、若い子に絡みたがる酔客にも、等しく接しているのだろう。備え付けの調味料を綺麗に整え、密かに労う。

一時間半ほどで店を出て、酔い冷ましに一駅分歩く。三月末の夜風はまだ冷々と、火照った体に吹きつける。足取りは軽妙に、鼻歌交じりにネオンライトを浴びて進む。たこ焼きの屋台で、明日の自分への手土産に一パック買う。

いつもの駅前に戻り、週一通いのメディアショップで、DVD最新作と映像化原作コミックをレンタルする。勢い隣のコンビニでもカクテル缶、スナック菓子、レジ横の揚げ物を買ひ込む。

アパートの部屋に入るなり、靴もシャツも脱ぎ散らかし、着古

したジャージをつっかける。調達した夜食をフロアに広げ、第二陣とばかりに、満杯の胃へぐいぐい押し流す。

テレビとパソコンの動画サイトを点け放し、大食いやら衝撃映像やらを流し見る。スマホ片手にフリマアプリとECサイトをサーフィンし、指一本でカートへ放り込む。

体力と時間を考慮する平日夜の節制を盛大に破って、暴飲暴食とエンタメ視聴にどっぷり耽る。自律自制から解き放たれ、健康と自由を浪費し、手軽な愉悅にだらだら身を任せる。欲望のままに振舞う独り時間、半ば熱に浮かされ、休日前夜は更けていった。

六九萬はロックマン！



福原大輝

今日タツヤは珍しく早起きして、家を出た。向かう先は雀荘である。

いつも通り素人から大金をせしめるわけではない。悪さをするヤクザまがいのやつをやっつけるわけでもなかった。タツヤは麻雀の前では善でもあり悪でもあった。そういうと聞こえがいいかもしれない。

ただ今日はそうした勝負師としてのタツヤではない。その証拠に、キチンとしているけどあくまで普通の格好をして、頭髪も落ち着いた黒にしている。

雀荘の戸を開けると、そこにはいつものように胸糞悪いおやじたちの姿はなく、子どもたちが走り回っていた。

立てかけられた看板には、子ども麻雀教室、と書かれていた。いつもはくわえたばこのマスターがタツヤを呼び止める。子ども受けしそうなレゴのTシャツなんぞ着てやる。

「タツヤ先生」

慣れない笑顔はやめたほうがいい、とタツヤはにらみつけたが、マスターはそれに気づかない。

「お前はあっちの席をよろしく」

指定された席に座ると、左右には目をキラキラさせた男女の子ども。そして対面には……。

なぜだ。なぜお前がそこにいる。

タツヤの目の前には必ずその男がいる。丸坊主の、男。名前はいつも覚えられそうで覚えられない。

この坊主男とはあらゆる場所で戦ってきた。もちろん麻雀で。いつも大事な決闘のときにはこの男が立ちふさがった。タイト

ル戦の決勝でなんども戦い、お互い勝ったり負けたりを繰り返してきた。

勝ち負けを通して、ライバルと認め合うのは少年漫画の世界。日常では、負けたほうはつばを吐いてその場を立ち去るのみだ。

坊主はギラギラさせた目をタツヤに向けた。

「やあ、タツヤ先生」

坊主の血走った目からはすさまじい緊張を感じた。当然のことだ。雀士が普段から子どもとの相手をするはずがない。

ギラギラとした目はまばたきを忘れ、明らかに怖い気がするが、子どもたちはそれを気に留めてもいない。最近の子どもは、落着いた大人だ。

「ごきげんよう……坊主先生」

震えた声でタツヤはあいさつを返した。

この「坊主先生」というワードが子どもたちに受けたらしく、くすくす笑っている。対してその坊主先生のほうはタツヤをにらみつけてきた。

仕方ないじゃないか。名前覚えられないんだから。

そのとき、マスターが教室全体に向けて声をかけた。

「それでは、各卓で説明を始めてください」

各卓には見知ったプロ雀士たちが座っている。みな子どもを受けするファッションをしてきたのだろう。中身とはちぐはぐだとタツヤは思った。

この坊主男は、見た目がヤクザの一員であるわりには、意外に子どもたちに対する言葉遣いは丁寧だ。

「二面待ちは幸せの形です」

タツヤにとっては気持ちが悪い敬語だが、一般的には違和感がないのだろう。子どもたちは聞き入っている。

「どうしてなの？」と男の子が聞いた。

「それはね……」

麻雀は三個のセットを四つと二個という十四牌の組み合わせを作るゲームである。

二個のほうは同じもののペア。

対して三個のほうは順子と刻子という種類がある。

刻子はトリオのことを言い、それぞれの牌で一種類四枚しかない中から三つ集めるのは比較的難しい。

「順子は一・二・三、二・三・四、……というように連番を集めることで作られる。」

「二・三があつたら……」

坊主は牌を並べて見せ、子どもたちはその手を見つめる。

「一と四どっちがきてもそろうでしょ。」

子どもたちはうなずいていた。

「だからそろえやすいんだね」

男の子がそういうと、坊主は満足そうにうなずいた。

この二・三などで待っている状態を二面待ちという。だから、麻雀を打つ人の中には、これを幸せの形と呼ぶ人もいる、ということだ。

すらすらと滞りなく、子ども向けに丁寧に坊主は説明した。

もしかしてその血走った目は、昨日準備をして寝不足のせいなのか、とタツヤは想像した。

形を覚えてみよう、と坊主は言い、子どもたちにいくつか問題

を出した。牌を二つ並べて、二面待ちの形を作る。子どもたちはそれに対して、滞りなく待ちを答える。今の子は賢いらしい。

次の問題として坊主は、萬子の七・八を並べた。萬子というのは牌の種類の中で、漢数字が書かれているものである。

子どもたちはすぐに六と九と答えた。

坊主はニコリとうなずいた。

「二人ともかしこいからね。少し難しいことを教えるよ」

これはね、と坊主は六と九の萬子を近づけた。

「ロッキューマン（六九萬）と呼ぶといいやすいでしょ」

本当だ、と二人ともうなずく。

「覚え方は、ロッキューマンはロックマン！」

坊主は右手を斜めに掲げて見せた。

これまでと違って子どもたちに反応がなかった。その気まずい沈黙を見かねて、黙っていたタツヤは口を開いた。

「今の子どもは、ロックマン、知らないだろ」

「うそだろ」坊主は目を見開いている。本気で驚いているのだろう。

「ああ、ビデオも知らない子たちだぜ」とタツヤは言う。

なんだって、もしかしてカーネルも、ブルースも知らないってことか、と坊主はぶつぶつ言っている。

ロックマンなしでも、ロッキューマンで子どもたちはわかっているんだから、別にロックマンにこだわらなくていいだろう、とタツヤは思っていた。

だが、気を取り戻したのか、坊主はギラギラした目で子どもたちを見つめる。

「いいかい、ゴロは大事だ……」

とてもいいタイミングで、マスターが全体に声をかける。

「……みんな一通り説明終わったみたいなので、とりあえず打ってみましょうか」

じゃあここ押してみて、と坊主が子どもに指示した。

自動卓のボタンが押されると、机に穴ができる。そこに牌を流し入れる。

もう一度ボタンを押すと、その下では牌たちが機械によって混ぜられている。そして「山」として整列され、やがてタツヤたちの卓上にせりあがる。

タツヤは自分の目に光が帯びていくのを感じたが、子どもたちの顔を見て瞬きをした。冷静に冷静に、と自分に言い聞かせる。

東風戦は普通の対局より短い。子どもたちが飽きないで楽しんでくれるように、である。

しゃべりは坊主にまかせてしまったが、対局は任せてほしい。

タツヤの得意な手牌読みが発動した。

子どもたちの手牌を読んで、もうこの牌でアガれるんじゃないかなと思ったときに、タツヤは思い切りよく牌を打つ。

「ロン！」

子どもは嬉しそうに目の前の十三枚の手牌を倒してアガった。

タツヤはうわあ、と言いながら点数を払った。

子どもたちの欲しい牌をタツヤは打って、振り込み続けた。タツヤはそれを狙って行うことができる。これは超能力ではない。

人の捨て牌から、手牌を想像するプロ雀士の技術だ。

でもそんな中タツヤも一回くらいはアガらせてもらって、勝負8は拮抗していた。

子どもたちの目の色は変わっていき、牌をつかむその手に力が入ってきた。雀士の顔になっているとタツヤは感じた。幼いながら立派な勝負師の顔に、タツヤも手を抜いてはいけなような気がしてきた。

その一方でタツヤの目が潤む。麻雀って、こんなに人を本気にさせる。やっぱりいいゲームだよな……。

点数は拮抗したまま、東四局、オーラスになった。

その十三巡目。これまで黙っていた対面の丸坊主がリーチをかけた。それはアガリの一步手前を表している。子どもたち、強い手を作っていただけにつらいだろうと、タツヤは手牌を読んだ。

なんてことするんだ、と対面を見ると、坊主はにやりと口角を上げた。

その瞬間、タツヤは坊主の思惑に気が付いてしまった。

タツヤの優秀な手牌読みが坊主に対して発動してしまう。おそらく、坊主の待ちは、あの待ちだ。

さらに、子どもたちの手牌を想像すると、確かにその待ち牌は子どもたちにとってはいらぬ牌だと気づいた。そして、その牌は山に残っている……。ダメ押しで、山読みが発動してしまっていた。

いけない、このままでは子どもたちが坊主に振り込んでしまう。その未来がタツヤには如実に感じられた。

坊主がアガってしまうと子どものどちらかが四着になり、坊主の逆転勝ち。そんなこといいはずがない。

だが、タツヤは次の牌をツモって盲牌したそのとき、悟った。
対面の坊主は目を大きく見開いて、うなずいた。

——よし、いくぞ！

タツヤは何も言わずに、九萬を……、切る。

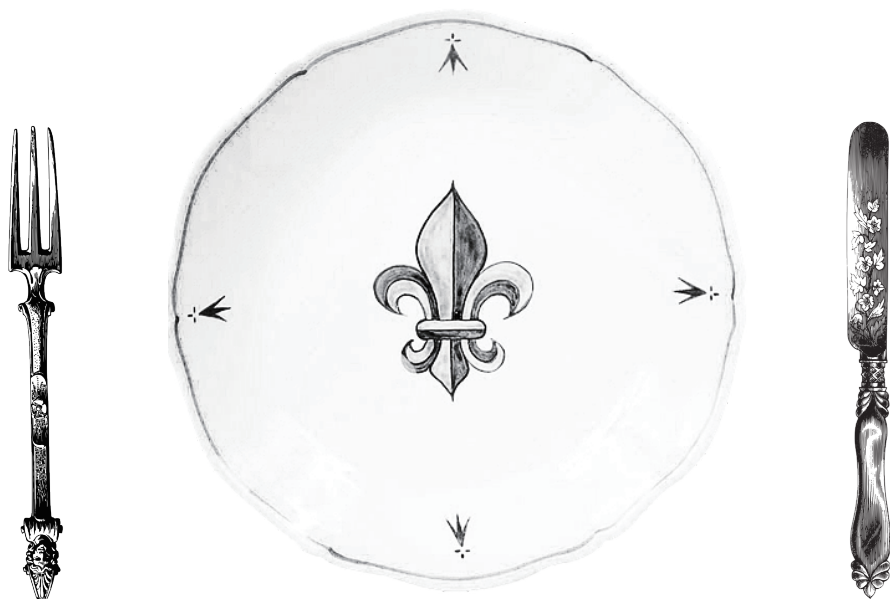
「ロン」と宣言して丸坊主男は立ち上がる。タツヤも思わず立ち上がっていた。

声を合わせて、二人は叫ぶ。

「ロックキューマンはロックマン！」

静まり返る中、対局の終わっている他の卓からパラパラと拍手が起きる。

「無職のコツ 第一回」



ナタリー爆川 244 歳

○まえがき

「無職は案外難しい」

これは私が、無職の身の上になって痛感したことである。人々聞かせれば「何をおかしなことを言ってるやがる」とドブネズミの死骸でも見るような目で私を見てくるのだが、仕方ないことである。この難しさは無職になった人にしか想像がつかないだろうことだからだ。

無職、それは社会的な地位や経済的な安定と引き換えに、身に余るほどの自由な時間を手にすることであると私は考える。無論、一部の例外を除いて、いつまでも無職でいることは出来ないから、私もいずれは就労することになるけれど、この「時間の黄金時代」を、私は余すことなく謳歌したいと思ったのである。

そこで私は「より良い無職ライフ」を送るために、種々の工夫を凝らすことにした。前職の退職前から「予行演習」と称し、考案したアイデアの有効性を試すべく、多くの実験を行っていた。まことにアホーなことなようではあるけれども、私はいたって真剣です。

本文では、数々のアイデアのうちから、よりすぐりの方法を記載しております。意識したのは実践が容易であること、金銭的な負担が少ないことである。挑戦のハードルが低く、継続のしやすいことでなくては机上の空論になってしまいかねないからである。

今、無職の人も、そうでない人も、奇妙でいてかつ絢爛な無職の世界、その片鱗を覗いてみましょう。

○食事の時間を固定する

無職の人間を待ち受ける困難の一つが「生活リズムの崩壊」である。

生活リズムの崩壊は体調不良の原因に直結している。人間、体が資本である、という言説は全くもってその通りで、無職とて体が資本なのだ。健康でなくては無職ライフを楽しめないのである。では、どうやって生活リズムを保てばよいのか。

「あああああつ、わかった、朝からジョギングせよとかぬかしよんねやろ。そんな七面倒なことができとったら苦労しとらんわい、アホンダラあ。無職時の人間の怠惰さをナメるな。霞食うたようなことほざいとったら、オドレの家に猿一万匹送り込んで暴れさすどお」

と、早とちりして喚き散らそうとしている方はどうか落ち着いて頂きたい。私とてランニングやジョギング等の重労働を朝から行うことの困難さを知っている。現に挑戦しようとして一日で懲りた。ゆえに大体案を提唱しようとしているのです。だから、猿の大量を送り込むだけは勘弁してください。納得していただけたら幸いです、どうか納得してください。では提唱しますね。

無職の人間が生活のリズムを保つ方法。それは食事を摂る時間を固定することである。

食事の時間によって、自身の体内時計の狂いを防ぐ、これが私流の生活リズム維持作戦だ。

この方法を選んだ理由の一つが、努力レベルの低さである。原則として、食事には努力が必要ないため続きやすい。食事は人間の生存に欠かせず、変な言い方をすればある種の「義務」である。

どうせやらなければならないことであるならば、それを利用してやれば良いのである。

本作戦では、「体内時計の維持」を最優先事項とし、食事の栄養バランスや味などについてまでは追求しない。いわゆる「ちゃんとした食事」を意識しすぎると、ストレスが溜まり、食事時間の固定が面倒になってしまうからだ。最初からちゃんとやろうとしすぎるのは、物事の継続において最大の敵である。

だから、余裕が出来るまでは、なるべく簡単に摂取できる食べ物を選ぶのがよいだろう。菓子パンでも、コーンフ레이크でも、お茶漬けでも、なんならカップラーメンでもいい。

摂取する時間帯についても、固定さえしていれば人それぞれで構わない。朝型、夜型など人の体内リズムは千差万別だからである。だから、大事なのはどの時間であれ「一定のペース」を保つことなのだ。私の経験上、話だが決めた時間から一時間前後の誤差はあっても大丈夫である。一時間前後の誤差があれば、少々用事が入ったりしても、維持することは容易になるだろう。

無職という自由の時代を最大限に謳歌するためには「ほどほどの規則」が欠かせない。食事の時間を固定するという些細なことが、あなたの無職時代を輝かせる第一歩になるでしょう。(了)

禍病 前編



氷川省吾

て運んでいる人影があった。

松村は人影に声を掛けようとしたが、ふと止めた。店主は70かそれ以上の爺さんだったが、机を運んでいるのは若い女だった。女にしてはそこそこの背が高く、ジーンズにセーターを着てエプロンを掛けている。代替わりしたのか、それとも臨時か。そんなことを思っていると、女がこちらに気づいて振り向いた。まだ若く、20代初めぐらいに見えた。化粧があまりなく、セミロングの髪をうなじでまとめている。眼鏡をかけているぐらいであまり特徴が無いように見えた。

「2名様ですか？」

ちよつと意表を突かれたが、松村がそうだと答えると、女は屋台の暖簾の向こうに声を掛けた。

「お客さんです。2名様」

暖簾の向こうから、はいよと聞きなれた男の声が届いてきたので、松村は少しほっとした。カウンター席——昔ながらの屋台の席に座る。調理台に向かう店主の姿があった。まだ準備中らしい。

「おじさん、お久しぶり」

いらつしやいと言いながらこちらに振り向いた店主に、松村はあいさつした。かなり前から通っていたので、すっかり顔なじみになっている。最初のころは松村はまだお兄さんで店主はおじさんだったが、今では松村もおじさんになり、店主はおじいさんになっていた。店主は2年前に最後に寄ったときと同じ格好をしていた。白い前掛けと屋号が入った紺色の上着に、板前がかぶっているような帽子。そこそこの年なのだが、腰も曲がっておらず、動きも機敏だ。それでも2年前に比べると少し老いが進んでいる

11月も終わりに近づき、日がすぐに落ちるようになった。金曜の夕方に仕事を早めに終わらせて退社した松村は、部下で若手の藤田と連れだって、職場近くの市民公園に足を運んだ。街中で良くイベントなどの会場になっている。冬の夜でも人が意味もなく集まっていたが、ここ2年間はそうしたことはなくなっていた。夜間にまたがるイベントは——場合によっては昼間でも——自粛され、店も夜は閉められ、夜中に人が出歩くこともまれになっていた。半年前に緊急事態宣言が解かれ、皆の警戒も緩んできたこともあって、夜にも店を開けたりで歩いたりするようになっていた。それでも2年前に比べるとまだまだ少ない。散発的に問題が起きてはいるが、確率で言えば交通事故に遭って死ぬよりもずっと低い。まあ、人間の心理としては自動車事故よりもよっぽど恐ろしく、確率が高いように感じられてしまうものだが、少なくとも数字の上では危険度は低くなっている。

そうした状態なので期待薄かと思ったが、遠くに赤色の提灯の光を見付け、松村は安心した。

「ホントにやってる」

横で藤田が言った。松村より10ほど年が下だが、ウマが合うので仕事以外でもつるむことがある。独身の気楽さで、金曜夜の寄り道にも気軽に乗ってきた。

灯りに近寄ると、見知った屋台の様子が見えてきた。軽トラの荷台を煮炊きのための設備にして、けん引するトレーラーに机やイス、寒さ除けのシートとテントを積んだスタイル。軽トラには赤ちようちんと、「柘植ラーメン」という屋号を書いた暖簾が付いている。まだ準備をしている最中で、トレーラーから机を出し

ようなところがあつた。体格が一回り小さくなった気がする。

「また出し始めたつて、桂さんから聞いて」

自分と同じように常連だった同僚の名前を出すと、店主はうんうんと頷いた。

「最近はずしになってきたみたいだし。この場所だと人通りがあるからね。だいぶ安全だよ。そちらの若いお兄さんはご同僚？」

藤田が頭を下げて、「どうも」と言った。

「柘植ラーメン教の布教活動をしようと思つて連れてきました。おじさんは元氣でした？」

「それなりにねえ。まあ、年が年だから故障つつか不具合はあるけれど。こんだけ年食つちゃうと、なんもやらない方が調子が悪くなっちゃうね。ボケるとやばいつてんで、新しいパソコン買つてSNSとかいろいろ始めちゃったよ。お兄さんらの仕事はどうだい？」

松村はこれまでの仕事を思い返した。どこの業界もそうだったが、松村の職場は特に大変だった。激動の様相を呈していたといつていい。

「今は普通な感じだね。今日は定時帰りできたし。2年前の……、騒動の最初の方はきつかったよ。忙しいし、遅くなったら下手に帰れないし。15年やってきたけど、この仕事で職場に何日も泊まりなんてことになるとは思わなかった」

「大変だったねえ。俺みたいな隠居ジジイは別にいいけど、仕事ができなくなつた人もいるし、亡くなつた人も多いしね。何もかも元通りつてなるには、どれぐらいかかるのやら。日本が大丈夫になつても、世界中がえらいこっちゃだからね」

そんなことを話していると、机を出していた女がいつの間にか店主の横に來た。熱いウーロン茶を湯飲みに注いで、温かいおしぼりとメニューと共に松村と藤谷に出してくれた。特徴が無い女だと思つていたが、近くで見るとなかなか整つた顔立ちの美人だった。ワイヤーフレームの眼鏡の向こうにある目が、どこか猫のそれを思わせる雰囲気で印象に残つた。

お茶を出した女は席を設置する作業に戻つた。その後ろ姿を、藤田が目で追つているのに松村は気づいた。そういえば彼女と別れたばかりという話だ。まともに家に帰れる生活になつたとたんに別れを切り出されたらしい。松村の方は既婚者だが、職場に泊まりこみになるたびに、色々どひやひやしていた。

「娘さん……、いやお孫さんですか？」

手際よくテントの支柱の間についた手を張つていく女の後ろ姿を見ながら、藤田がそんなことを言つた。

「ミズキさんのこと？ みんなそれ聞いてくるねえ」

面白そうに店主は笑つた。女はミズキというらしいが、それが苗字なのか名前なのか分からなかった。

「俺に子供はいないよ。松村さんには言つたことなかつたっけ？」

「知つてるよ。隠し子がいたりして」

「俺あ、嫁さん一筋だよ。今でも恋してるよ」

詳しくは聞いたことはなかつたが、店主の妻はかなり前——それこそ半世紀近く前——に亡くなつたか行方が分からなくなつたかしたらしい。

「あの娘はバイトで入つてもらつてんだ。さすがにこの年になると、お嬢さんよりヘナチョコになつちまつてな。鍋に水入れて持

ち上げたら、それだけで息切れしちまう」

ミズキは石油ストーブをテーブル席の方に持って行き、煙突代わりのパイプを設置していた。席を準備する手際の良さから、こういう仕事に慣れているのが分かる。どれだけ年をとっても、店主の人を見る目は確かのようなのだ。

「まあそんなわけで、またラーメン作れるようになったわけよ。まだちょっとだけ準備するから、食べたいもん決めときな。前みたいに行列出来るわけじゃねえから、ゆっくりしてってくれや」
久しぶりに見るメニユーに目を通しながら、松村はここ2年間は外食すら満足にできなかったことを思い返した。まさか世界がこんなことになるとは、全人類のうちだれが想像しただろうか。そして自分も、思いもかけない作業に従事することになった。

怪人の検視だ。

人氣が無い道路を、何台もの大型車両が列を成して走っていた。

装甲を纏った4輪駆動車、車体の上に砲塔を持つ8輪車両、8輪で走るコンテナのような車両。どれもが緑色の迷彩模様で塗られている。陸上自衛隊の装甲車両がコンボイを形成し、他の車の姿がなくなった道路を統べるように進んでいる。走るルートは事故の名目で一時的に通行止めになっており、30トン近い車たちが時速60kmで走っても一般車両をひき潰す心配もなければ、信号や横断歩道で一時停止する必要もない。何より、路傍から写真を撮られてSNSにアップされる可能性を下げるができる。こうしたコンボイを見かけても場所や時間をネットにあげないように要請が繰り返されているが、罰則があっても破ろうとする者がある。余計な情報が出てしまう前に、ことを終わらせてしまうことが何より重要だった。

前から3台目の車——96式装輪装甲車——の中で、二等陸曹の一条は静かに椅子に座っていた。自衛官らしく坊主に近いほど短く刈った髪に、瘦せた顔立ち。目つきが悪く視線が鋭いせいで、ヤクザの若い衆か出所したばかりの服役囚かと間違われ、自衛官だと明かすと納得したような顔をされる。年は25だったが、顔立ちが若いせいで、なおさら危険な雰囲気があると言われていた。訓練以外で人を殴ったことさえなかったのに酷い言いがかりだと常々思っていたが、もしかすると本質の部分がいつの間にか顔に出ていたのではないかと、最近になって思い始めていた。

今の一条は、戦闘服の上に18式個人防護装備——つなぎ型の核・生物・化学兵器防護服——を着て、その上から分厚い防弾チョッキ3型を身に付けている。チョッキの表面には弾薬や手榴弾を入

れた大小さまざまなポーチが取り付けられていた。

車内には同じ格好をした同僚が7人、4人ずつ横に並んで向かい合わせに座っている。このチームは中部方面隊の合同任務部隊第1小隊第2分隊の名前が付けられていた。他の車両には第1から第3までの分隊がそれぞれ乗っている。少し後からは、別のコンボイで第2小隊が付いてきている。2つの小隊のメンバーは全員が制服の胸に、月桂樹の葉で囲まれたダイヤモンドのデザインが入った小さな徽章——レンジャー徽章を付けている。ゲリラコマンドを想定した特殊作戦訓練課程の修了者に与えられる証。アスリート級の体力試験に合格した者が参加し、ギブアップや疲労骨折、ドクターストップで6割が脱落する。

文字通り死ぬほど厳しいが、合格しても給与が増える制度はなかった。だが、2年前からそれが変わった。一条と同じか、それ以上に頑丈で体力に自信がある連中が日の目を見ることになった。誰もが予想していなかった形で。

一条は海外派遣も多い宇都宮の中央即応連隊に属しており、同じところから何人かのレンジャー資格持ちが選ばれている。他にも日本版の海兵隊武裝偵察隊とも言われる佐世保の第一水陸機動連隊、習志野の第一空挺団——仇名は第一狂ってる団から選ばれた人員も入っている。それに加えて、車両搭乗員や支援要員を含めて150人前後の人間が、いま行われている真夜中の遠足に関わっていた。なかなかの大所帯で、これから向かうのは相應の大捕り物の現場だった。一条ら第1小隊は、その先鋒を務める。

危険な仕事になることは確実だが、一条は特に何も考えていなかった。強いというなら腹が減ったということぐらいだ。同じよ

うな任務を何度も繰り返きたので、すっかり慣れてしまっている。設立から今までの2年間で何度もメンバーの入れ替わりがあり、第2分隊の中では隊長の日野木、同期で腐れ縁の杉田と共に、一番の古株になっていた。入れ替わりの理由で多いのが、負傷と殉職が3番目、応援や人員不足の埋め合わせのための配置換えが2番目。1番多いのが精神的に持たなくなったことによる辞退。

そんな部隊で長続きしていると、一条は自分が少々おかしい人間なのではないかと思うようになっていく。自分以上にタフな精鋭が精神を病んでギブアップする仕事に向かっていくのに、気になっていることは「腹が減った」。タフなのではなく、アホなのかもしれない。だからと言って、何がどう変わるわけでもない。今重要なのはこれからの仕事を終わらせることと、腹が減っているということだけだ。

いつも仕事の前は食事をとらないように言われていた。血糖値が上がると眠くなつて判断力が落ちる上に、負傷して胃が破れたときに、中身が腹腔に漏れて腹膜炎になる危険もある。だが今日に限って何故か腹が減る。腹が減りすぎて低血糖になっても厄介だった。

一条は前の席に座っている、陸士長——一条より2階級下だ——の桜井に声を掛けた。

「桜井、なんか食う物持っていないか？ 飴ちゃんでもガムでもいいけど」

桜井は肘を太ももに乗せた姿勢で俯いていたが、声を掛けられて顔を上げた。

「あ、いや。もってないス。どうしました？」

車内には灯りは無かったが、声から桜井がかなり緊張していることがうかがえた。3週間前に前任の隊員が精神的に耐えられなくなったので、その交代で配置されたばかりだった。出勤は10日前に続いて2回目、今回ぐらいに規模が大きい作戦は初めてだ。緊張するのが普通だった。この状況で、相手に飽を持てているか聞く自分はやはり変だと一条は思ったが、空腹感という現実ばかりはどうしようもない。

「ちよつとだけ腹が減ったんだ。無いなら別にいいけど。……今更ビビらなくてもいいだろ。最初で大丈夫だったら、次も同じだ」
「2回目だと慣れると思いましたが、やっぱりいろいろキマスね……。一条さんは今までどれくらい出勤しました？」

桜井に聞かれ、一条は記憶を掘り起こしてみた。一回ずつ思い出すには数が多い。週ごとのおおよその平均で考える必要があった。

「今年で40……、46回目だったかな。去年は60か、70か……。よく覚えてないな。結構多い方だったと思う。一昨年はもっと多かったな」

「それぐらいだよな。手当てでかなり儲かった」

桜井の横に座っていた杉田が身を乗り出した。一条とは腐れ縁で、2年前に部隊が結成される前から、同じ栃木県の即応連隊に配置されていた。中学と高校ですつと柔道をやってきたという話で、一条よりも身長が10 cm高く、体重は20 kgほど重いゴリラだ。だでさえ狭い装甲車の車内がさらに狭く感じられた。

「来年はもっと減るだろうな。再来年は無くなるかも」

「出番が無いほうがいいってのはよく分かるんだけど。もらえて

た分が無くなるってなると、残念っちゃうか、なんっちゃうか」

一条と階級や職能手当がおおよそ同じなので、出勤手当で収入がどれぐらい増えたのかはおおよそ知っている。ボーナス2回分を余裕で超える額だった。

「俺はやばい仕事なんか無いほうがいい」

贅沢には興味が無いし、平時の給料で問題なく生活も貯金も出ているのだから、命の危険はないに越したことはない。それでも移動願いを出さないのは、単純にそれほど追い詰められていないことが理由だったそれにどうせ誰かがやる必要があるなら、出来る人間がさつさとやってしまう方がいいとも考えている。望んではないとはいえ、今の仕事では日本でも有数の専門家になつてしまった。他の奴が代わっても、自分ほどには出来ないのは確かだ。

「お前らどれくらい貯めた？」

それまで黙っていた竹田が皆に聞いた。1年前に佐世保の部隊から配置された陸曹で、年は一条たちより少し上ぐらい。体格はひよろ長く、少し老け顔なせいで、杉田からは何となくラクダに似ていると言われている。

竹田の問いに、100ぐらい、半分使ったという声上がる。その中で、杉田は「ほぼ0」と答えた。

「次に出た時にやられちゃったら、貯めてても意味ないとか思っちゃって、あんまし残してないな。楽しかったけど」

「怪我して動けなくなった時のために、貯めておこうって考え方は無いのか」

自衛隊に居れば衣食住は保証されるが、そこから放り出されれ

ばいっぺんに無くすことになる。杉田はその点を不安に思っていない。宵越しの金は持たないとまではいいないが、江戸の世にいれば間違いなく実践していただろう。

「ラーメン食いたいな」

その時、唐突に樫本がぼそりと言った。竹田と同じ佐世保からやってきた隊員で、杉田と同じぐらいに体がでかく、あまり口をきかない。その代わりなのかどうか分らないが、唐突にその場にそぐわないことを言うことがある。その内容がなぜか、場にいる誰かの心理を言い当てていることが多い。軽いテレパシー持ちで、周りの奴の無意識と同調しているという噂であった。今回のラーメン発言には桜井が反応した。一条の胃袋も軽く反応した。

「ラーメンで思い出したんですけど」

また俯きがちになっていた桜井が顔を上げた。

「駐屯地の人に聞いたんですけど、事務局の近くですげえ美味いラーメンの屋台が出てたらしいんですよ」

何人かが、桜井の方を向いた。

「えらく美味いし、メニューもちよこちよこ新しいの出すから、リピーターも多いみたいで。教えてくれた人もなんか長いこと通ってたファンとか言っていました。さすがに2年前から出なくなってたけど、それがまた店を出し始めたとか」

へえ、と一条は思わず言った。最近はや間営業をしている店も増えて元通りになりつつあるが、屋外店舗はまだ少ない。それでも客が来るということは、店主の機もがそれなりに座っていて、場所も良くてはいけない。そして集客力が相当に高い、つまりはそれだけ美味しいということを意味する。

「それと、バイトなのか店主の娘か孫か分かんないけど、その子が結構可愛いとか美人だとかいう話も出てるみたいですね。それで探す人がいるとか」

「マジか」

杉田が話に食いついた。一条らが所属している正体の中でも、恋多き男として知られている。ただ一条が知っている限り、長続きした例は多くない。大抵の場合、向こうから別れを切り出されているようだ。

「お前まだ懲りてないのな。こいつ前に飲み屋の姉ちゃんで痛い目見てるぞ」

一条が親指で杉田を指すと、軽い笑い声が周囲から漏れた。くだらない話を続く中、一条の隣で背もたれに身を預けていた隊長の日野木が、ゆっくりと体を起こした。杉田よりもさらに背が高く、座っていても長身とわかる。整っているが何をやっても表情がほとんど変わらない顔に、考えが読めない目をしており、小隊全員から畏怖の念を持たれている。

「お前ら。10分前だ」

日野木が短く告げる。低く良く通る声で、杉田が「鉄みたいな声」と評している。それを聞いて、それまでが休憩中のようなであった車内の雰囲気が一気に冷えていった。仕事の時間だ。2年も続けていけば慣れては来るが、それでもミスをすれば命の危険に関わる現場であることには変わりがない。

全員がそれぞれのガスマスクポーチから防護マスクを出した。顎から顔に当てて、ベルトを頭に被せて装着する。今のモデルは目の部分がスキーゴーグル型なので視界は良くなっているが、夜

につけるとやはり暗く感じる。少し息苦しくもあるが、これが無いと色々と面倒なことになってしまう。

ガスマスクの上から防護服のフードを被ってひもを締め、その上からヘルメットを被る。これで全身が隙間なく覆われた。放射性物質で汚染されている場所でも、短時間なら平気で動ける。無線を確認し、ヘルメットに装着していた単眼型の個人用暗視装置^{JGVSVS}を右目の前に下ろした。スイッチを入れると、レンズを通して車内の様子が明るい緑色の濃淡で表示された。全員が同じ動作をして、肅々と最終準備を進めている。

一条は足の間に立てて置いていた銃を引っ張り上げた。防衛省がアメリカのフォステック社から購入したのオリジン12散弾銃。銃身が短く、引き金の前に下に突き出した弾倉を備える見た目は軍用ライフル似ているが、発射するのは12番口径の散弾やスラッグ弾だ。この2年間というもの、一条は自衛隊制式の89式や20式といった自動小銃を操作していない。

銃にゴテゴテと付けている部品——ホログラフィックサイト、赤外線レーザー照準器——の作動を順番に確かめる。重要なのは、銃身の右側に取り付けたやや大ぶりのフラッシュライト。通常の光に加えて強力な紫外線を照射する。それも日焼けマシンやジェルの硬化ライトが発するUVAではなく、より波長が短く生体への害が強いUV-Cを。まともに浴びれば比較的短い時間でも日焼けどころか火傷を起こし、長く浴びれば皮膚ガンや白内障へ直行コースになる。

一通り確認した一条は銃の装填ハンドルを引いて、弾倉から弾薬を銃の中に送り込んだ。正面では杉田が自分の銃を

持ち上げて、同じように確認をしている。ハンガリー製のGM6対物ライフル^ス。最近になってイギリスの特殊部隊が採用した代物で、重機関銃用の・50BMG弾を発射する。照準器には長距離狙撃用のスコープではなく、低倍率の近距離用の物が付けられていた。

杉田が銃のロックを解除すると収納されていた銃身が前に飛びだし、同時に弾薬が装填された。

「外に出てからやれよ」

狭いんだから。一条がクレームをつけると、杉田は悪びれた風もなく声を出して笑った。

「悪いな。それより、明日は皆でラーメン屋探しに行こうぜ。桜井が言ってたところ」

「バイトの娘目当てだろ。ラーメンは良さそうだけどな」

そう言いながら一条はボディアーマーの表面と腰回りに付けているポーチの位置を確認した。弾薬、工具、手榴弾が一式、パコード、爆薬と信管、緊急医療キット、発炎筒^{フレア}、ケミカルライト。分かりやすいように、全員が同じ位置に取り付けられるようにしている。全て問題なし。完全に準備を終えて、すぐに立ち上がれるように重心を前に移して座りなおす。

一条は指の関節をバキバキと鳴らしてから銃のグリップを握った。害獣の駆除——吸血鬼退治の時間だ。

“そいつら”がいつごろからこの世に存在していたのかは誰もよく知らないが、世間に知られるようになったのは2019年に入ってからだった。一般的な説は、中国の奥の方——タクラマカン砂漠の辺り——がルーツで、そこから世界中に広がっていったという物だ。本当はもっと昔の別の場所が起源で、中国がこつそりタクラマカンで研究していたのが逃げ出したという噂もある。どちらにしても、北京の政府は否定しようと躍起になっているが。

最初はウイグル自治区での不穏な動きから始まった。世界はまた少数民族への弾圧強化かと思ったが、やがて自治区以外でもおかしいことが増えていった。行方不明者の増加、人が凶暴な犯罪者や獣に襲われる事件の頻発、警察や軍の動きの増加、夜間の経済活動の制限と各種取り締まりの強化。中国政府は“妙な事”を隠したがっていたが、ほどなくして異常なものの画像や動画がネットの海に流出し始めた。ミイラのようになった死体。凄惨な集団殺人現場。どこか普通の人間とは違う妙な連中の姿。

やがて他の国でも似たような事態が発生し始めた。港湾都市や空港がある街を中心に、最初は失踪事件、続いては殺人事件。そして失踪と殺人の規模が大きくなり、誰の目にも明らかな脅威となっていた。ロンドンでは地下鉄で停電が起きた際に列車が襲撃され、50人以上が連れ去られて、残りのほぼ全員は挽肉のような有様にされるた。アメリカではベルリン発ニューヨーク着の飛行機で、着陸後に乗客のほぼ全員が虐殺された。ムンバイで、カイロで、イスラマバードで、リオ・デジャネイロで、マルセイユで、モスクワで。その他、世界中のあちこちの国、地域で。日本でも離島、山間の集落、地下鉄など、外から目が届きにくい環境での

大量殺人や集団失踪が発生するようになっていた。

先進国の政府は早くから干からびた死体のサンプルを確保したことで、“犯人”の正体に気づいていた。発表が遅れたのはパニックを恐れたこともあるが、事実があまりにもバカバカしいので、下手に発表すると頭のねじの緩み具合を心配される内容だったからだ。SNSで広められる陰謀論に流される者がいるご時世でもある。

だが被害の拡大したことで、どれだけバカバカしかろうが事実を公にせざるを得なくなった。独立した個別の機関が同一の結論を得た時、それは事実とみて差し支えない。ある日、世界各国の政府、国連、その他民間企業が、同じことを報告した。
「一連の事件の犯人は『吸血鬼』です」。

店主とミズキが準備をほとんど終える頃に、松村と藤田は普通にラーメンを注文した。柘植ラーメンは月ごとにメニューを色々変える。気温や湿度、旬の素材も考えて、人が最もおいしいと感じる品を提供できるようにと、店主が色々工夫しているのだ。今の季節のラーメンは、鶏白湯と味噌を組み合わせたスープに中細麺の組み合わせ。時期が違えば、醤油ラーメン、清湯スタイルのあっさり、魚介、つけ麺、汁なしの担々麺、冷麺までいろいろと変わってくる。そのどれもが十二分に美味い。

今の季節の味は、体脂肪に気を付けなくてはいけない松村には危険な域に近いが、たまにはいいだろうという気持ちがあった。健康を心配してくれる妻には申し訳ないが、キャバクラやパチンコに耽るよりはるかにましだ。

店主は中華包丁を使って鮮やかな手つきで白髪ねぎを切り終え、続いてチャーシューの準備を進める。テーブル席の準備を終えたミズギが戻ってきて、湯やその他もろもろの用意をしていた。

「お客さん。ラジオ付けてもいいかな？」

店主の問いにOKを返すと、ミズギがラジオを付けた。選ぶ番組はその場でいい加減に選ぶのば恒例で、ミズギが適当に周波数を変えて、最初に引っかけたニュース番組に合わせた。しばらく前まではニュースと言えば吸血鬼の話題一色だったのだが、ようやく普通の話題も入ってくるようになってきた。吸血鬼関連の話でも、幸いにして大きな事件はめったに聞かなくなっている。日本はそこそこ安定しているので、外国での対策についての話が多い。ジャカルタやマニラでの被害が続いており、インドネシアやフィリピンは軍の力をかなりつぎ込んで、大規模な掃討を連日行っている。

あれに比べたら日本はマシな方かと、ラジオを聞きながら松村はぼんやりと思った。金曜の夜に、久しぶりに食べられるお気に入りのラーメンを注文したのに、松村の頭の中には仕事のことごとどまっていた。連中の死体を解剖し、組織のサンプルを作り、それを分析するため部署や研究所に送るのが松村たちの仕事だった。ニュースに話題を提供する役割の一端を担っていたと言ってもいい。

松村と藤田の仕事は元々は——正確に言えば今も——監察医で、異常がありそうな死体の検視を行ってきた。そのため吸血鬼の存在を世界中の政府が把握するより前の時点で、松村の職場に

は被害者の遺体が運びこまれていた。

目にしたのは散々にむごたらしい物を見てきたはずだが、それでも目を疑わざるを得ないような代物だった。人間の皮にどろどろになったゼリー状のものが詰まっているような物体。共通して首筋の部分が破れており、体組織は半ば液状になるまで軟化し、そのうち何割かは失われていた。

後で分かったことだが、首筋を食い破られた後、そこから強力な消化酵素——マムシ科の毒ヘビが分泌する物よりもさらに強力な——を流し込まれたことで体組織が液化したのだ、首筋を食い破った相手は、傷口に口を付けたまま、ドロドロの半固形物になった犠牲者の体組織をすすって食べたのだ。丁度、パック入りのゼリー飲料を飲むときのように。

クモの仲間や肉食のカメムシ科の昆虫が行う体外消化と似ていたが、人間を襲えるサイズの生物でこれをやる種類は存在していなかった。そのため松村も最初は未知の疾患かと考え、「吸血鬼」のワードはどう頑張っても浮かんでこなかった。

だが「犯人」の正体が判明し、その特徴が明らかにされると「吸血鬼」の名前もそれなりにあてはまっていると考えるようになった。この2年間で、それまでの吸血鬼のイメージ——ドラキュラ伯爵に代表されるアレ——は完全に失われてしまった。今の吸血鬼のイメージは、真っ白な無毛の肌と、サメのような牙を持つ化物の姿だ。

対策が始まってからしばらくすると、松村は犠牲者ばかりでなく「犯人」の方も解剖することになった。吸血鬼の見た目は、人間に近いながらも本能的に人間とは違うことを理解させる部分が

あった。肌はほぼ真っ白でキャンバス生地のように固くこわつき、全身の毛髪が完全になくなっていて。頭髮どころか、まつ毛や鼻毛に至るまですべてだ。目の光彩——いわゆる黒目まで白い姿をしている。ドラキュラ伯爵は犬歯だけが長かったが、実際の吸血鬼は前歯から犬歯までは全て、ピラニアやサメの歯を思わせる非常に鋭い牙に変化している。おまけに、手足の先の爪もリン酸カルシウムと高強度のケラチンによって、分厚く硬い刃物のような代物となっている。催眠術も変身能力も無い代わりに、首に咬みつけば肉をえぐり取り、爪を振るえば腹を搔つ捌くことができる。優雅な夜の貴族は強風の前のろうそくの火よりもはかなく消え去り、体毛が無い奇怪な獣の姿が全人類の記憶に焼き付いた。まるで恐竜の復元図が、デカイイグアナから機敏な鳥に変化したときのように。

さらに、吸血鬼は1つの種としての生物ではないことも分かった。元は人間——正確に言えば人間の死体であり、本体ともいえるのは動物的な性質を持つ単細胞生物、いわゆる原虫と呼ばれる物だった。これが元の体の体細胞の20〜60%を置換する形で繁殖し、元の宿主の体細胞を活性化させて、相対的に一度死んだ体を疑似的に生きた状態にしている。体液も赤血球や白血球の代わりに原虫がうごめくスープになっており、これが皮膚を通じて酸素を取り込むことで、原虫で作られたサンゴ礁のごとき臓器を活かし続けている。

超常の力でよみがえった死体でもなければ、超越的な夜の種族でも、進化した人間でもない。死体と微生物の群体が合わさって、1体の生物として活動するようになった超個体的存在。それが吸

血鬼の正体だった。死体を解剖した際には体液が牛乳のように白いことに驚いたが、あれは全て生きた微生物だった。人間の解剖でも感染症予防の観点から消毒は常に完璧にやっていたが、小隊を知ってからは尚のこと厳重に行うようになった。

原虫は34度以上の環境、つまり生きた人間の体では繁殖できない。吸血鬼として再活動するためには、死体の方も損傷が少なく新鮮でなくてはいけない。そのために体液を1リットル飲んだところで吸血鬼になることはなく、食い殺された場合も吸血鬼にならない。“再生産”のためには、手順を踏む必要があるということだ。

吸血鬼の構成要素が微生物だと分かった時は、吸血鬼の存在が明らかにになった時以上のパニックを引き起こした。生きた人間には感染しないということは最初から判明していたが、それでもマスメディアもSNSでは不安を煽り立てるような言葉が躍り続けた。人間は目に見える脅威より、目に見えない物の方のリスクを高く見積もる傾向にある。こちらを殺傷する能力を持つ動物よりも、それ単体では影響力の無い微生物に恐怖を感じることを一概に愚かとは言えないかもしれない。誰もかれもが数字と科学に基づいて判断できるわけではない。

そうした傾向も、直接的な被害が減ってきたことで収まりつつある。のど元過ぎれば何とやらということらしい。

色々と思い出しながら聞くラジオの話題が、途上国の都市部における対策のために日本を含めた先進国が援助を拡大しているという内容になった。ヘリコプターがどうこうという話が出た時、藤田が「そういえば」と話を切り出した。

「5時ごろだったんですけど、アパッチが飛んでいったの見たんですよ。フツーに飛んでるの見たの初めてですよ。あれって多分、まだどこかで“掃除”するんでしょ」

松村はアパッチと聞いてネイティブアメリカンの部族かと思ったが、すぐにヘリコプターの事だと気が付いた。軍事関連には詳しくないが、アパッチが軍用の強力なヘリコプターだということぐらいは知っていた。機関砲やミサイルを装備して、地上の敵を攻撃する兵器だ。

「そんなの飛んでたのか。戦車運んでるのは1回見たことあったけどな……。俺らが知らないだけで、まだ色々続いているんだよなあ」

吸血鬼への対策については、色々公表されないことが多い。吸血鬼がSNSやテレビを利用して情報を収集していることが明らかになっているためだ。また多くの人が一斉に動けば、それで対策側の動きが読まれる危険もある。テロリストよりも始末に負えない相手を本気で潰しにかかるときに、重要な情報をばらまくわけにもいかない。何かが実行されれば、結果だけが簡潔に公表されるのが常だった。

「世の中ってのは。いろんな人がいろんなところで働いて成り立ってるもんだからね。知らないだけで、誰かが頑張ってくれてんのさ。お兄さん方の仕事だってそうだろう？」

具の準備を終えた店主が、麵を出して湯切りざるに入れ、沸き立つ湯に沈めながら言った。松村は自分の仕事の詳しい内容を店主に話したことはなかったが、自分の事を言われたような気もした。言われてみれば自分が吸血鬼を解剖してデータを集めている

ことはほとんどの人が知らないが、そのデータが巡り巡って誰かを動かしているのだろう。

「今のところ安全になってきたってのは、そういう人らのおかげだね。こうやって店を出して、お客さんが来てくれるようになったんだから、ありがたいことだよ」

店主がよどみなく手を動かしてどんぶりに調味料を入れ、スープを注いで溶かす。麵がくっつかないように、湯切りざるを軽く揺らした。

「おじさんみたいに屋台出しても、お客が来てくれるところはまだ少ないだろうね。ちょっと前までは、普通の店も夜は閉めちゃったことが多かったからなあ。普通の家も夜は雨戸まで閉めてさ。うちも嫁さんに言われてシャッターの雨戸を付けたよ。ドアも頑丈な奴にして」

「街中の普通の家が襲われることは、ほとんどないんですけどね」
藤田の言葉通り、夜間に人が多い街中や郊外のベッドタウンが襲われることはほとんどなかった。地下鉄のような公共交通機関、オフィスビルなど、多数の人間が集まる場所や、山間部の集落のように外へのアクセス手段に乏しい場所を群れが襲撃するケースがほとんどだった。

「俺も嫁さんにそういったんだけれどね。やつぱり怖いって気持ちには理屈じゃないんだよなあ。雨戸は普通に防犯にも使えるから付けたけど、さすがにUVライトは止めたよ」

吸血鬼は日の光に弱い。これはフィクションの設定と一致しており、あの怪物が吸血鬼と呼ばれる理由にもなっている。もっとも、映画のように非の光を浴びただけで燃え上がって灰になるよ

うなことはない。あの設定は、1960年代以降の映画から生まれた描写だ。ドラキュラ伯爵も、日の光の下では怪力以外の超能力が使えなくなるだけで、真昼に平気で行動していた。

現実の吸血鬼が日の光を嫌うのは、本体である原虫が紫外線で殺される、文字通り殺菌されてしまうことが理由だ。カエルと同様に、呼吸の多くを皮膚呼吸に頼っている性質から、原虫は常に体表近くを歩き来している。だが、日中は原虫が酸素を取り入れるために皮膚の近くに來たときに皮膚を透過してきた紫外線にさらされて死んでしまい、人間でいえば溶血性に由来する酸欠のような状態が引き起こされる。さらに体の結合組織を構成する原虫のコロナーも破壊され、壊血病に似た症状まで呈することが分かっている。日の光を長時間浴び続けると酸欠になり、皮膚が薄いとところから体液が漏出し始め、そのうちに死ぬ。

とはいっても死ぬまでには日中でも5時間程度はかかり、衣服の着用や日焼け止めと言った比較的簡単な紫外線対策でも耐えられる時間を延ばせることも分かっている。一般販売されているUVライト程度では、ほとんど役に立たず、ひるませるぐらいの効果が欲しければ、専用の強力なUVCLライトが必要だ。吸血鬼除けとしてUVライトの販売数が大幅に増えたが、夜中に虫が寄ってくるぐらいの意味しかない。

「あれホントは危ないんすよね。吸血鬼追い払えるような奴なんかだと、下手すりゃ目潰れますよ。規制掛けられてんのに、勝手にどっから輸入して使いたがる奴が結構いましたよね」

藤田の言葉通り、普通のUVライトでは効果がないということ
が知れ渡ると、今度は強力な殺菌用の物の覆いを取り外して使お

うとする輩まで出てきた。そんなことをしても、近くで顔を照らしでもしない限りはひるみすらしない。相手が服を着ていればそれだけで無意味になる。

「夏の間に俺が使ってる、ほら捕虫器って奴。紫のランプがついて、蛾とかが来るとバチッて電気が流れるの。あれぐらいでどっか行ってくれるなら苦労しないんだけどねえ」

店主は軽く笑いながらどんぶりに湯を注いでスープを仕立て、麵の入ったざるを引き上げた。湯を切って麵をスープに沈め、上に具を添えていく。いつの間にか4人組の客がやって来ており、ミズキがテーブル席に案内していた。

この屋台の周囲には、まぎれもない平和な日常がある。だが、世界のどこかでは吸血鬼が跋扈して多数の人を殺している。吸血鬼に対処する人々のために、上空をアパッチが飛ぶ。今ここでラーメンが出来上がっているのを見ている自分は、人間も吸血鬼も含めて何体もの死体を切り刻んでいる。それぞれが違う世界や歴史の出来事のようなだが、まぎれもない地続きの世界でほぼ同時に発生している。店主の言葉通りに、世の中は知らないところでも回り続けている

世界中で失踪や殺戮事件を引き起こした犯人が「吸血鬼」だという発表は、歴史に残る衝撃を世界に与えた。普通なら大混乱になって意味不明なうわさが所かまわず飛び回るところだが、大量失踪・大量殺人の事実と、「物的証拠」の存在が物を言った。怪物の死体と、それに殺された人間の死体の両方が揃っているのだ。疑う段階はとくに過ぎていた。

人間を食う化物が社会に潜伏し、すでに多くの人を食い殺し、数を増やしている。さらに、日本どころか世界中で同じことが起きている。この現実には日本中をパニックに陥れた。疫病と同族以外で天敵がいなくなった人類に、何の前触れもなく捕食者がテリトリー内に現れた。

ただし、幸いな点があった。まず、調査の段階である程度の情報が集まっていたこと。少なくとも吸血鬼という存在がどのような特徴を持つのが理解できていた。正体も分からない相手より、目に見える怪物の方が対処しやすい。

次に、ゾンビ映画のそれとは違って、襲われたら誰もが簡単に吸血鬼になるわけではないこと。つまり、ネズミ算式に増えて人類を数で圧倒することはない。

そして最大の利点が、「殺せば死ぬ」ということ。脳か心臓を損壊させれば、普通の動物と同じように活動を停止する。

吸血鬼の生物としての身体能力は人間よりもはるかに高い。組織維の間にも原虫がコロニーをつくっており、これが筋肉と同様に伸縮する。そのために見た目以上に筋量が多い状態になる。体液の原虫は体表から酸素を取り込むので、全身の筋肉に常に十分な酸素を送り込める。血液を作る必要がなくなった骨髄は退化し、

代わりに骨の中までカルシウムが沈着することで、結果的に骨密度が向上する。これらによって吸血鬼は人間の体格を保ちながら、大型肉食獣に匹敵する筋力と瞬発力を発揮するようになる。素手ではどうあがいても勝てる相手ではない。

だが、人間は槍や弓矢しかない時代から、ライオンやクマを殺して生存圏を広げてきた。吸血鬼が増える速度がそれほど早くないのなら、殺していけば数を減らせる。これまで人類はいろいろな生き物を絶滅させてきた。巨大なエビオルニスも、強力なケープライオンやカムチャッカオオヒグマも、最も数が多いと言われたリョウコバトも世界から消した。天然痘ウイルスでさえも消した。吸血鬼は確かに人間よりはるかに強い。だが個体としての強さは、種としての生存能力の強さと一致しているとは限らない。発表からさほど立たないうちに、世界中の国が同じ結論を下すに至った。新しい害獣が現れば、同じように駆除すればいい。

日本でもあわただしく法令の整備が進められ、お役所仕事だと言われがちな日本行政にしては異例のスピードで事が運んだ。自衛隊及び警察からの選抜人員による吸血鬼の掃討組織の結成。例によって街中での武力行使にケチをつけようとした者もいたが、血と人体の残骸がぶちまけられた事件現場、体組織を吸い取られた生乾きのミイラのような死体、そして吸血鬼の姿という現実の光景の方がよほど強かった。

急ピッチで話はまとまり、あちこちの特殊部隊から人がかき集められた。警視庁と各都道府県警の特殊強襲部隊^A、銃器対策部隊^S、特殊事件捜査係。海上保安庁の特殊警備隊^T。海上自衛隊の特別警備隊^B。陸上自衛隊の第一空挺団、水陸機動団、冬季戦技教

育隊、そして特殊^ス作戦^ゴ群。こうした部隊における有能な連中、つまるところ日本で最も殺しに長けた人材を引っ張り出して、寄り合い所帯が結成された。

警視庁と警察庁が捜査を行い、ねぐらを突き止めれば防衛省が指揮する「掃除業者」を送り込む。市民の安全確保と誘導を警察が担当する間に、駆除業者はあらゆる手段を行使して害獣を皆殺しにする。終わった後のケツ持ちと諸々の発表は内閣府が直々に行う。こうして、日本にも「吸血鬼駆除業者」が誕生した。

予定時刻の5分前の時点で、全員の準備は完璧に整っていた。ガスマスクと緑色の装備で全身を固めた、奇怪な駆除業者の群れが出番を待っている。日野木が自分の時計に目をやり、全員を見回した。

「最終確認だ。目標は感染体の処理。上位個体が少なくとも4体確認されている。その排除が最優先。サンプルの確保は不要だ。遭遇した感染体は全部殺せ」

上位個体は文字通り吸血鬼のヒエラルキーの上位にある個体だ。吸血鬼はほぼ例外なく群れを形成して生活する。同じ群れに属する個体同士が有する原虫は、DNA検査では遺伝子的にほぼ同一の株であることが分かった。ちょうどアリやハチのように、親株を持つ同じ個体から生まれた奴らで群れを形成するらしい。その親に当たる個体がヒエラルキーの上位に位置して群れを統率する。

上位個体は下位の個体に比べると、より人間に近い見た目をしている。肌の色はかなり青白いが普通の人間のそれに近い質感に

なあって、無性毛——つまりは2次性徴で伸びる毛以外の毛髪も生えて、虹彩も薄いながら色が戻っている。これは特殊な進化を遂げたのではなく、吸血鬼となってから時間が経つと、メラニン色素の生成能力を含む皮膚の機能が戻ってきたことに由来するらしい。つまり吸血鬼は生まれて時間が経つことで、より人間に近い姿に戻っていくことになる。それまでの変異の度合いが大きいので、顔立ちは元の体の持ち主とはかなり違ってくる。せいぜいがわずかに面影を残す程度だ。何より、元の人間としての記憶は一切持っていない。宿主の脳は一度機能を停止して多くの部分が壊死し、それを原虫が補っているのだ、元のそれとは違う物になっている。一度電源を切って部品も破損したコンピューターに、非正規の部品をつなげて無理やり再起動させたような物だ。

吸血鬼の脳はいったん「破損」しているのだ、活動を再開した直後の知能は生まれたての猫ぐらいしかない。だが学習によって脳組織の機能は活性化し、1年程度で人間の幼児と同程度になる。ただし情緒は発達せず、本質的には捕食動物（プレデター）としての本能を備えている。サメやワニのように。人間の子供の知能、大型肉食獣の強さ、サメやワニの本能を持ち合わせ、群れで動く生物だ。

上位個体は吸血鬼として再起動してから時間が経過したことで、学習が進んで知能が発達した存在であると考えられている。上位個体を「親」として生まれた吸血鬼は、当然ながらその個体をリーダーとして成長する。初期には養育され、それ以降は教育を受ける。こうして群れが形成される。

アメリカの疾病予防管理センターによれば、人間に近い見た目

と、単独で社会に潜伏して生き残れる最低限の知能を獲得するまでは、少なくとも5年程度の時間を要するらしい。つまり、これから殺す予定の連中は、日本で生まれたわけではないことを意味する。どこか外から日本に上陸し、死体を利用して吸血鬼を増やした。文字通りの外来生物だということだ。だが、それ以上のことは分からない。人間には敵意や暴力衝動以外の物を向けることがなく、接触した人間は絶対に殺そうとする。生け捕りにしようとした場合は、怒り狂いすぎて自死してしまう。

このため、上位個体がどこから来たのかはまだ分かっていない。ただ1つだけはつきりしているのは、上位個体を始末すれば、吸血鬼の群れは統率された行動ができなくなる。知能が未発達の場合は行動パターンが稚拙で、逃げ場を失ってすぐに尻尾を出す。時には日中の隠れ家を見付けられずに死ぬことさえある。

今回の任務で消す上位個体は4体。ねぐらは廃工場で、上空からのスキヤニングで、かなり大規模な群れが潜んでいることが確認されている。これまで見つからなかったことは驚きだが、それはやり口の巧妙さが際立っていたからだ。何台かのトラックをどこからか調達し、“狩り”をする際には上位個体が運転して群れを遠くへ運ぶ、そこで群れを解き放って人間を殺害、捕食、誘拐する。さらった人間は群れと一緒にトラックに隠して拠点に持ち帰る。これで自分たちの拠点を絞らせずに、全国各所で殺しを続けてきたらしい。トラックを放棄しても、吸血鬼の身体能力なら徒歩で山を越えて長距離を移動できる。

これまでに一条たちが駆除してきた連中よりも賢いのか、同類が殺されていく様子を見て学習したのかは分からない。化け物が

さらに賢くなつて、文明の利器を使いこなしてきているというのは、単純に数が増えるよりもよほど危険だと言えた。日野木の言葉通り、上位個体を殺すのが何よりも優先される。

一条としても、取り逃がすのだけは避けたいたい事態だった。万が一取り逃がせば、そいつがさらに賢くなつて、いずれかち合う羽目になるかもしれない。それは願ひ下げだ。だから処分する。

「生存者がいる可能性もある。可能な限り保護するが、上位個体の排除が最優先だ。間違えても気にするな」

日野木の言葉に、桜井がわずかに身をすくめるのが分かった。人間かそうでないかは、撃つてから確かめればいい。人命軽視だと言われても仕方が無いが、こちらとしては確かめている暇がないので仕方が無い。一条は幸いにしてそういう体験をしたことはなかったが、他の隊では何度かあったという噂だ。

一条は桜井に呼び掛けた。

「難しく考えるな。作業だ。手順通りやればそれでいい。分からなくなったら日野木さんの言うとおりにしろ」

桜井が頷く。装甲車が進み続けていると、上から空気を叩くような音が聞こえてきた。支援のために投入されたヘリのローター音だ。ヘリは毎回投入され、今回は特別なブツが寄越されていた。

ローターが空気を叩く音に重なるようにして、リズムカルな破裂音が響き始めた。短く1秒ほど続き、数秒ほど途切れ、また1秒ほど続く。A^アH^ハ64^パD^ダ戦闘ヘリコプターが、機首下に装備している30mmチェーンガンを発射している。空飛ぶ戦車の仇名を持つ重武装のヘリが、最先端の赤外線カメラで地上にいるあらゆる物を捕捉し、一発ずつが小型の榴弾並みの威力を持つ炸裂

焼夷弾を連射する。吸血鬼の走行速度と瞬発力はオオカミ並だが、上空を飛ぶ攻撃ヘリにとってはただの的だ。

吸血鬼の駆除は相手に不利な昼間にやることが多いが、今回のように相手の数が多く、尚且つ支援火器が使える状況であれば夜間に行うこともある。連中は夜になると、ねぐらの外に出てくることが多い。精密誘導兵器で空爆してねぐらごと吹き飛ばせば楽だが、粉々にしてしまうと何体いたのかが分からなくなる。上位個体を取り逃がす危険を考えれば、支援火器は外に出た奴を掃除することだけに使い、建物の中には一条ら「駆除業者」が乗り込んで、順番に始末していく必要がある。戦争で歩兵がいなくなることはないし、ネズミやシロアリを駆除する業者が床下やほこりだらけの換気口に入らずに済むこともない。

砲声が続く中、装甲車は工場の入り口の柵をなぎ倒し、敷地へと突入した。同じタイミングで空気を引き裂くような音が響き、それに軽い爆発音が続く。上から白い煙が幾筋も降り注いで、周囲の空間に充滿していった。アパッチがスモーク弾頭を搭載したハイドラ70ロケット弾を連射している。これを突入予定地点の周りに発射して、これから装甲車を降りる一条たちの姿を覆い隠す。装甲車が停車し、装甲車後部のランプドアが開いた。同時に周辺にばらまかれた白いガスが入ってくる。

「行くぞ」

日野木が短く告げると、一条たちは煙を押しよけるように外に出た。装甲車の側面をカバーするように展開し、周囲に銃口を向けて待機した。周りには真つ白な煙が充滿し、山火事でも起こったような有様となっていた。そのせいで突入予定の建物が良く見

えないが、装甲車の赤外線カメラがカバーしている。

一条らは片膝立ちの姿勢で、側面に銃を向けた。吸血鬼が横からくる場合の警戒だが、連中はこの煙の中では満足に動けない。ただの赤燐スモークではなく、玉ねぎやニンニクに含まれる、有機チオ硫酸化合物が添加されている。犬や猫がネギ科の植物を食べるとこの成分によって赤血球が破壊され、重篤な貧血を起こす。人間も多量に摂れば同じ症状を呈する。

全身で皮膚呼吸している吸血鬼は、この煙の中にいれば相当の量をダイレクトに体液中に取り込むことになる。その結果、貧血による低酸素症に見舞われ、強い倦怠感と運動能力の低下が起る。国立感染症研究所が開発した、特製の対吸血鬼用の毒ガスだ。

『左、クリア』

『右、クリア。敵影無し』

無線で連絡を取り合い、装甲車に合わせて前進する。煙越しでも突入予定の建物が見えるところまで近づくと、宙を泳ぐ巨大な魚のように、頭上をヘリが横切った。2機のUH-60汎用ヘリコプターが建物の上空でホバリングする。側面のドアが開いてロープを下に垂らすと、それを伝って一条たちと同じ装備に身を包んだ隊員がラペリング降下していった。上からの掃討を担当する第2小隊のメンバーだった。屋上から入って、階段掃除と同じ要領で下に向かって「駆除」をしていく。第3小隊は下に逃げてきた奴らを迎え撃つ。一条ら第1小隊は、吸血鬼が好きな地下を掃除する。

地下に行くための階段は、一条たちの正面にある壁のすぐ内側に位置している。樫本が太い筒のような見た目の

110m個人携帯対戦車弾³を担いで部隊の横に出てきた。グリップと照準器が付いたフレームに発射筒が取り付けられ、その先端からは長い信管が突き出たロケットの弾頭が覗いている。携帯式のロケット弾発射無反動砲——簡単に言えばロケットランチャー。

樫本が片膝を立てて建物の外壁に狙いを定める。竹田がその横について、反対を向いて片膝立ちになった。一条たちは樫本の後ろに立たないように移動した。後方の安全を確認した竹田が樫本の肩を叩くと、即座に樫本がロケット弾を発射した。腹に響く轟音と共にロケット弾が飛び出し、発射筒の後方からは反動を相殺するための金属粉末が噴出して、白いガスを激しくかき乱した。金属粉を至近距離で浴びれば、衝撃で何mもふっ飛ばされて即死する羽目になる。

人間が目視出来ないほどの速度で建物の外壁に到達したロケットは、脳を揺さぶる爆発音と共に明るいオレンジの閃光を放ち、うもうとした煙を噴き出した。爆発の圧力を集中させて外壁に穴をあけ、その穴から爆風と破片が入り込んで内部をズダズダにする。吸血鬼が壁の向こうにいた場合は死傷するか、それですぐに衝撃ですぐには動けなくなる。

日野木が装甲車のドライバーに合図を送った。エンジンを喰らせ、ロケットが命中した壁めがけて装甲車が突っ込んでいく。一条たちはその左右斜め後ろから追隨していった。装甲車の正面に取り付けられたドーザーブレードが、まだ煙を上げている外壁を直撃し、鉄筋コンクリートを引き裂いた。

頭を建物に突っ込んだ装甲車の左右に展開した一条たちは、建

物の外壁に沿って待機した。一条が先頭で、杉田らがその後ろに並ぶ。装甲車を挟んで逆側には日野木らも同様に待機している。一条は胸に付けたポーチから、スプレー缶のような形をしたMK3A2手榴弾を取り出した。

装甲車が後退し始めると、一条は手榴弾のピンを抜き、壁に開けられた大穴の中へ放り込んだ。反対側に位置した桜井も同じように手榴弾を放り込む。穴に背を向けて身をすくめると、2つの爆音と共に大量の煙が外に吐き出された。

『10、こちら02。これより入る。送れ』^{ヒトマル}

日野木が小隊長に向けて送った連絡が、インカム越しに届いてくる。

『02、こちら10。了。終わり』

装甲車が下がり終え、文字通り車一台が入るだけの穴が露わになった。日野木の合図を受け、一条たちが先頭になって穴から建物へと足を踏み入れる。壊した壁は広い廊下の突き当りだった。すぐ右手に階段がある。壁に沿って動き、銃口で物を見るように周囲を確認する。暗視装置の緑色の視界の中で、上への階段の壁に写った影が動くのが見えた。そちらに銃口を向けた時、UVCLライトが照らす円の中に吸血鬼の姿が入ってきた。真っ白で無毛の、形だけ人間によく似た化物。元は女だったらしいことが体つきから見取れた。ぼろぼろの作業着を着ており、おそらくは吸血鬼になってから身に付けた物らしく、サイズが全くあっていなかった。

そいつは一条の姿を認めるや否や、全部が真っ白な目を見開き、サメを思わせる歯をむき出しにして絶叫した。声だけは人間のと

きとほぼ同じで、かんしゃくを起こした子供がするような動作に思えた。この2年間という物、比喩抜きで親の顔より頻繁に見た表情だった。今更ひるむわけもない。

一条は銃に取り付けたライトをそいつの顔面に向けた。吸血鬼がまぶしさと痛みにひるんだところで、胸の中心に照準を合わせて銃を2発撃つ。当たった場所に1cmほどの穴が開いた直後、小さな爆発音とともに胸が内側から弾け飛び、バスケットボールが入りそうな空洞が生じた。吸血鬼の心臓は、細かい肉切れになって体外に四散した。吸血鬼は足を踏み外し、階段を滑り落ちてきた。とどめに頭にも1発撃ち込む。首から上が完全に吹き飛んだ。

吸血鬼も心臓を破壊されると体液を循環させることができない。組織は個別の原虫から構成されているので簡単には死なないが、体は制御能力を失って動けなくなる。脳にも十分な量の血液が行かなくなつてやがて死ぬが、人間よりも死ぬまでに時間がかかる。だから確実にとどめを刺す。

「奥に敵！」

廊下の先を見ていた杉田がそう叫び、即座に発砲した。散弾銃よりもはるかに強力な対物ライフルの轟音が廊下を震わせ、銃口の先にあった吸血鬼の体が真っ二つになった。上半身と下半身が文字通り両断され、大量の真っ白な体液と共に床に崩れ落ちる。上半身はまだ生きており、罵り声か呪詛らしきことを叫んでいた。声からして元は中年の男らしいことは分かったが、言っている内容は理解できなかった。杉田がもう一発撃つと、叫び声が聞こえなくなった。

UVCLライトと暗視装置で周囲を確認し、動く物が存在しない

ことを確認する。

「クリア」

一条が告げる。榎本と一条、桜井と竹田がそれぞれ階段の上と下を確かめた。

「階段確保」

「ガス」

日野木の指示に従い、竹田がガス手榴弾を取り出して地下へ放り込んだ。外でまき散らされた物と同じ白い煙が、下の階に充填し始める。榎本がベルトに付けたボックスからミニカーほどの大きさのヘリコプターを取り出して起動した。ノルウェー製の超小型偵察用ドローン。ちっぽけだが3台のカメラが付いており、携帯ゲーム機によく似たコントローラーを通して操作する。どんな危険が待っているか分からない場所を偵察するときの代物として開発された、1セット2万ドルのおもちゃだ。角を覗き見る時に使う手鏡の進歩版としてはいささか高価だが、それだけの価値がある。

「敵確認。こちらに向かってきています。8体以上。ガス範囲外で停止。上位個体は確認できず」

「02b先行。02aバックアップ。手順通り」

一条が先頭になって、先行の4人が階段を降り始めた。残りのメンバーは少しだけ離れて後から続く。

ガスマスクとフードのせいで、自分の吐息と鼓動が大きく聞こえた。暗視装置の向こうで緑色に表示された風景が見える。何度やっても、この緊張感是不快だった。自衛隊の現場はキツイ、汚い、危険の3Kが揃っているだが、吸血鬼の駆除は臭いと暗いも

加わった5Kだという自嘲がある。

仕事を終えてラーメンを食べに行く。この上なく簡単なことなのだが、そのためには地下にうごめく5Kな仕事を片付けなくてはいいけない。

喫茶店文芸 2022 年 10・11 月合併号

発行：喫茶店文芸

監修：マサユキ・マサオ

編集：氷川省吾

HP URL

<http://literarycafe.wp.xdomain.jp/>

